

退職によせて

吉野 亜矢子

英語英文科で仕事をさせていただいた短い期間については、これ以上に心残りのことはなく、これ以上に感謝していることはない、に尽きます。

今でもよく覚えているのが、仕事を始めた直後に家族とかわした会話です。新しい仕事はどうか、と尋ねられて、私は「ここに理想の職場を見つけたと思う」と言ったのです。何よりも私をそう思わせたのは、文化、文学そして言語を偏ることなく教えて行こう、という英語英文学科の姿勢でした。イギリス文学という英語非母語話者にはとてもつらい分野で英語に苦勞し続けてきた自分が、少しでも下の世代に同じ苦勞をさせない環境を作るには、系統立てた言語の知識を文化文学の知識と同時に与えるプログラムが必要だと考えていたのです。そして及ばずながらその一助を担えることは誇りであり、やりがいのあることでもありました。

優れた先生方とぐんぐんのびて行く学生に囲まれ、非常に充実した数年間でした。残念ながら、家族の生命か、仕事かという想定もしていなかった選択を迫られた時にも、学科は一貫してぶれることなくサポートイブであり続けてくれました。

長いスパンで、ずっとずっと、ささやかながらも貢献をしていけるだろうと思い込んでいた場所を離れざるを得なかったこと、むしろご迷惑をおかけしてしまったことは、とても心残りのことです。同時に、おそらく、多くの人が経験し得ないような僥倖で良い人々に囲まれたことを、何よりも感謝しています。